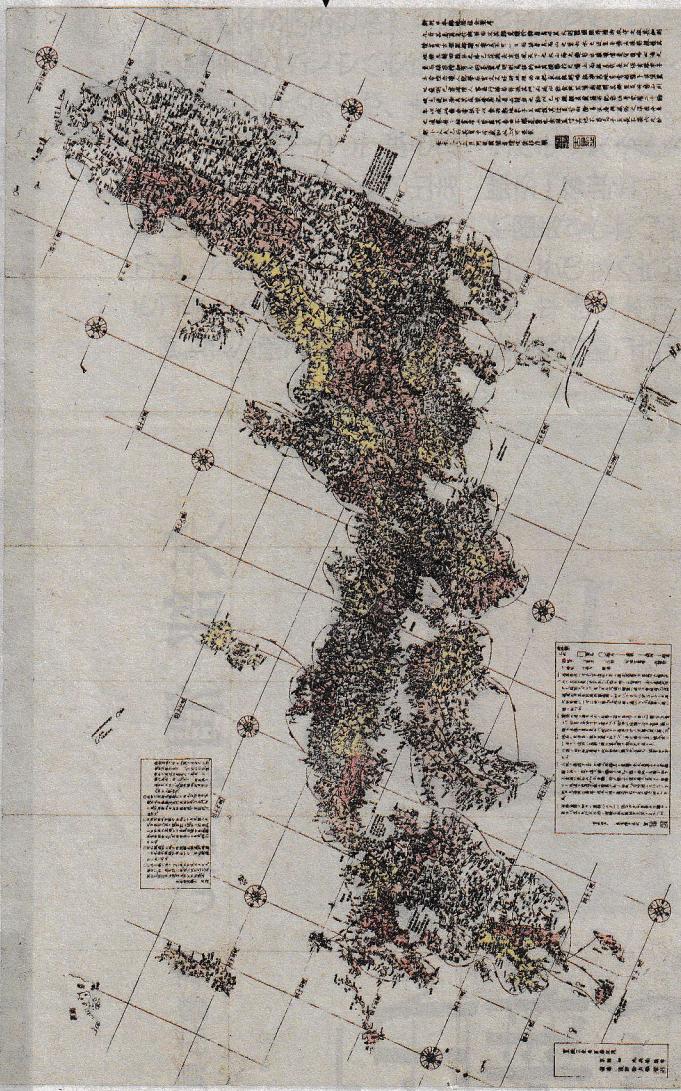


この地図←作ったのだあれ?



茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（一七一七～一八〇一年）が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より四十二年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めに功績が評価され始めた。

伊能より42年早く

赤水は高萩市赤浜の農家生まられで、幼い頃に両親を亡くした。親族に育てられたが、学問に興味を持ち、水戸藩の学者たち。三十代半ばで正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、二歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になつた。

赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて經線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも一七七九年に初版が完成了した「改正日本輿地路程全圖」（通称・赤水図）は、下で儒学や天文学、地理学実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。

長久保赤水 知名度じわじわ



一八二一年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことでも有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長（も）は「友人が多く旅人にもお茶をこちらして話を聞くなど、情報収集能力にかけていた」と強調する。

赤水の関連資料六百九十三点は、二〇一七年に県指定有形文化財になるなど徐々に価値を評価され、国の文化審議会は今年三月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に答申した。

地元顕彰会がPR

さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した不思議な海上現象を元にした絵本「りゅうのひかり」を出版。縦約八十四センチ、横約百二十八センチの赤水図のレプリカ発行を目指し、資金三百万円をクラウドファンディングで募る。

動きは県外にも広がり、今後、吉田松陰ゆかりの松陰神社（山口県萩市）でもレプリカが展示される見運じだ。佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかりと位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

JR高萩駅前にある長久保赤水の像 茨城県高萩市で